日本比較文化学会
関東支部第３６回例会

2013 年 12 月 14 日

於： 東京未来大学

研究発表要旨

日本比較文化学会関東支部

【発表者名・発表論題】

（注）発表者の持ち時間は発表 20 分、質疑応答 10 分とし、時間厳守とする

開会の挨拶(13:00)　関東支部長　近藤俊明（東京未来大学）

【文化領域①】　司会：　（依頼中）

１３：１０～１３：４０　カルバロ・ペトラ　（早稲田大学大学院博士後期課程）

論題：　南洋文化に関する松本信広の思想成形期：１９２１～１９３３年

13：４５～14：１５　野原みゆき　（青山学院大学大学院修士課程）

論題：　ウチナーンチュによる「明るい沖縄人」というイメージの内面化に関する研究

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊小休息（１４：15～１４：２５）　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【文化領域②】　司会：　近藤俊明（東京未来大学）

１４：25～１４：55　長谷川詩織　（愛知教育大学）

論題：　情熱から責務へ

―映画『アッシリアの遠征』におけるユダヤ民族表象とその寓意―

15：00～15：30　鈴木光男　（東京未来大学）

論題：JHP による美術教員トレーニングの成果と今後

―カンボジア王国スヴァイリエン州･カンポット州での取り組みの実際―

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊　休　　息　（　１　５　：　３　０　～　１　５　：　４　５　）　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【語学・文学領域】　司会：　鈴井宣行（創価大学）

１５：45～16：15　半田幸子　（東北大学大学院博士後期課程：東北支部所属）

論題：ミレナの文章にみる親近性とカリスマ性

――エッセイ「シンプルの道」を題材に――

16：20～１６：50　金　善花　（埼玉大学大学院博士後期課程）

論題：　次元形容詞「高い」の意味体系に関する日中対照研究

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊小休息（１６：50～１７：００）　＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

１７：00～17：30　高橋　強　（東海大学）

論題：　望ましい ESP 教育

閉会の挨拶(17:30)　関東支部副支部長　花澤聖子（神田外国語大学）

南洋文化に関する松本信広の思想形成期：1921～1933 年

カルロヴァ･ペトラ（早稲田大学大学院博士後期課程）

松本信広（１８９７～１９８１）は日本の民族学者で、南洋研究の開拓者として知られています。本発表では、南洋文化に関する松本信広はどの影響によって成形されたのかを考察する目的とします。なお、南洋文化に関する思想の影響が著しかった１９２１～１９３３年に集中します。

南洋文化に関する松本信広の思想は三つの影響によって成形されました。一つ目の影響は、南洋に関する日本の諸研究による影響です。松本は生涯の先生だった柳田国男より沖縄を含める南洋の重要性を知り、南洋に関する研究会に参加しました。それに、琉球・台湾に関する日本の著書を読みました。その影響の結果で、松本は日本と南洋と重要な繋がりがあると気づきました。

二つ目の影響は、オースロアジア語の学説の影響です。松本信広はソルボンヌ大学に留学したとき（１９２４～１９２８）、Jean Przyluski の先生からオーストロアジア語の学説を勉強しました。Przyluski がインドにおけるオーストロアジア語の影響を研究していたので、松本は日本語に対するオーストロアジア語の影響をテーマにした博士論文を出しました。従って、松本は Przyluski の学説を受け入れ、日本にオースロアジアチックという南洋影響があったと主張し始めました。

三つ目の影響は、西洋学者の著書の影響です。フランス留学中、松本は南洋に関する図書を多く手に入れましたが、そのなかは南洋文化の移住を主張するものが多かったです。特に、Paul Rivet や Roland B. Dixon という文化伝播論者の影響が重要でした。その影響で、松本信広は南洋文化が日本にも伝播されたと考え始めました。上記の三つの影響の結果で、松本信広は１９２１～１９３３年に南洋文化に関心を持ち始め、日本と南洋との関係を考えるようになりました。

ウチナーンチュによる「明るい沖縄人」というイメージの内面化に関する研究

野原　みゆき（青山学院大学大学院修士課程）

[背景]

今日、メディアに描かれている沖縄を見てみると「癒される場所」、「楽園」、「リゾート」等の明るいイメージが前面に押し出されている。それによって沖縄が抱えている米軍基地問題や財政問題などの負の部分を、ポジティヴなイメージのなかに塗り込めて隠蔽してしまうイデオロギー的機能があることが指摘されている(岩渕， 2004)。そもそも１８７２年の琉球処分以降、長らく沖縄は本土による差別や偏見の対象で、今日のような「癒し」や「楽園」などのイメージは皆無であった。しかし、１９７２年の本土復帰以降、沖縄は差別の対象から一転して「癒しの楽園」となる。このイメージが形成された転機として、１９７５年に開催された沖縄国際海洋博があげられる。返還以降も沖縄には米軍基地が残り、基地への核兵器持込や米兵による犯罪などの不満から、地元民は日本政府やアメリカに対して大規模な抗議デモを行った。こうした動きを抑える役割を果たしたのが、海洋博である。「海—その望ましい未来」というテーマを掲げたこの開発型イベントを契機として、官民一体となって埋め立て工事やゴルフ場などレジャー施設の公共事業を進め、沖縄をリゾート地として形成していった。結果、多田治が言うように、「〈基地〉〈戦争〉〈運動〉といったリアルな現実領域とは異なる、もう１つの〈沖縄〉、パラレルワールドとしての〈青い海〉〈観光リゾート〉の〈沖縄〉を、幻想領域において構築する」効果が生まれたのである（多田， 2004）。

以上のように、「癒しの楽園」といった沖縄のイメージが生まれた背景には、本土復帰後の沖縄の諸問題を隠蔽し、本土資本のなかに沖縄を組み入れる政治・経済的なイデオロギーがあったことを分析している。

[問題]

これまで「癒しの楽園」という沖縄のイメージが生まれた社会・文化的な背景に対する研究は行われて来たが、それが沖縄人にどのような影響を与えたのかに対する研究はほとんどされていない。本研究では、沖縄人自身がどのように過去の差別の記憶を払拭し、海洋博以降の「明るい沖縄人」というイメージを内面化していったのか、沖縄戦から海洋博を経験した人々（70~90 代）を中心にインタビューを行い、会話の語り口を分析し、主体形成の観点から明らかにしていく。

[複雑な老人の語りの構造]

沖縄戦を語ることに慣れている老人の語りを分析してみたこと、沖縄戦を非日常世界として語ることが分かった（＝暗い沖縄）。一方、現地のご老人９名にインタビューを行い会話分析してみたところ、戦争体験を理非陣な暴力を受けた私という形の語りではなく、苦労語りもあるが当時の状況を笑いながら明るく語る傾向がみられた（明るい&暗い沖縄）。この結果から、後者の老人の中に複雑な語りの構造があることが明らかになった。

[引用文献]

岩渕功一，田仲康博，多田治（編）（2004）．沖縄に立ちすくむ―大学を越えて深化する知「ちゅらさん」「ナビィの恋」「モンパチ」から読み解く〈沖縄〉の文化の政治学　東京　せりか書房.
多田治（2004）．沖縄イメージを旅する一柳田國男から移住ブームまで　東京　中公公論新書（中公新書ラクレ）．

情熱から責務へ
―映画『アッシリアの遠征』におけるユダヤ民族表象とその寓意―

長谷川詩織（愛知教育大学教育創造開発機構　研究員）

本発表で取り上げる『アッシリアの遠征（*Judith of Bethulia*）』は、バイオグラフ社が 1914 年に公開した、D. W. グリフィス監督による長編映画である。同作品は、旧約聖書外典のひとつである「ユディト書」を原作としていることから、大まかには宗教劇に区分される。ブランチ・スウィート、リリアン・ギッシュ、メエ・マーシュ、ヘンリー・B・ウォルソールなど、当時は名前が非掲載でありながらも存在感を示していた俳優陣が総出演し、1913 年 7 月に完成していたにも関わらず、1914 年 3 月まで公開されなかった。短編映画でプログラムを組んでいたバイオグラフ社の上映システムに馴染まなかったことに加え、グリフィスの無謀な資金繰りによる確執が尾を引いたことが原因のようである。しかしながら、それは合衆国内で広く受容され、グリフィスのキャリアのなかでも記念碑的な位置を占める作品となった。

本発表では、民族の優越性を前提とする帝国主義的達成の誇示ではなく、歴史と文化を通じて国内における多様性を束ねる場の創出として、『アッシリアの遠征』の実践を位置づける。映画の原作である「ユディト書」は、旧約聖書外典という異端性があるとはいえ、古代の宗教的共同体が共有していた真理の一部を担う、ユダヤ民族の精神世界を構築する書物である。古代イスラエルの歴史を特化するストーリーの流通は、アングロサクソン中心主義から逸脱する「異本」の浸透を意味する。民族的な要素が濃厚であるにも関わらず、同作品が国内で広く受容されたのは、ルーツが多様な移民が共有できる基盤が含まれていたからであると想定する。

本発表では、まず、イタリア、フランス、イギリスの長編映画が同作品に与えたインパクト、および、グリフィスの演劇に対する趣向について、産業的な背景を踏まえながら整理していく。次に、原作である旧約聖書外典「ユディト書」に記された古代イスラエルの歴史や地理の情報が、『アッシリアの遠征』の歴史的信憑性を高めるにあたり、どのように関わっているのかを考える。続いて、「ユディト書」に含まれた多義性が映画にどのようにあらわれたのか、その記述とイサドラ・ダンカンのモダンダンスを思わせる舞踏場面の比較を通じて考察する。最後に、ユディトがホロフェルネスの首をとりユダヤ民族を勝利に導くエンディングに着目、同時代に流行していた野外劇（とりわけパレード）の演出がどのように映画に取り込まれたのかを見ていく。それを通じて、第一次世界大戦の不穏な気運が高まる合衆国で、いかなる方法で愛国心を鼓舞し、共同体の結束を訴えたのかを考えていく。

JHPによる美術教員トレーニングの成果と今後

―カンボジア王国スヴァイリエン州･カンポット州での取り組みの実際―

鈴木　光男（東京未来大学）

1. カンボジアにおける美術教育の現状

ポル･ポトの独裁政治によって、教育をはじめカンボジア全体のシステムが破壊された。その後、多くの国、諸機関・団体の支援によって少しずつ教育体制は整いつつあるが、未だその成果は十分ではない。

また、美術教育に限ってみれば、80 年代は「絵画」「芸術（歌・舞踊）」が初等教育学習指導要領に含まれていたが、90年代には社会科の中に統合された。2006年からの現行学習指導要領での社会科における芸術教育の目的は、「芸術・美の分野の知識を育てること」とある。しかし、授業で採り上げられる題材は模範となる絵をそっくりそのまま写す活動（コピー画）や、国旗の模写などとなっている。

現在、カンボジア支援を長らく行っているNPO学校をつくる会Japan Team of Young Human Power（以下JHP）は、2006年からスタートした生活技能プログラム（Local Life Skills以下LLSP）に絵画表現や造形活動を取り込む可能性を見出し、2010 年度から「カンボジアに美術教育を広げよう！プロジェクト」を展開している。今回は、そのJHPが推進するプロジェクトの中の教員養成トレーニングを担当した活動内容を軸に報告する。

2. これまでの東京未来大学カンボジア・プログラム

2010 年度から始まった本学カンボジア・プログラムにおいて、3 年続けて学生ボランティアの引率者として関わってきた。現地では小学校や孤児院を訪れ、以下のような授業を学生自身が担当した。

2010年度：トントン紙人形相撲・クレヨンによる技法遊び他

2011年度：たまねぎ染め・油粘土による造形

2012年度：紙飛行機・ビニル袋ロケット・影絵人形

3. JHPによる「美術教育を広げよう！プロジェクト」

1）LLSプログラムを通した美術教育の普及

JHP が現在進める美術教育に関する主な支援の一つとして、LLSP の題材づくり・テキストの作成が精力的に進められている。現在までカンボジア教育省にこのテキストを提案すると共に、いくつかの小学校で実践し、モニタリングも行っている。

2）教員養成トレーニングを通した普及

JHPは教員養成トレーニングを実施しており、2012年度10月のトレーニングには114名の教員・校長並びに、州・郡の教育局担当者も参加した（2012年度JHP事業報告書）。

4. 本年度教員養成トレーニングの担当となって

ここまで述べてきたような JHP と本学カンボジア・プログラムの歩みの過程で、JHP の LLS の提案と現場の具体的な実践を結ぶ美術教育の専門家としての関わりが求められることとなり、本年度 8 月から 9 月に

かけてスワイリエン州とカンポット州での教員養成トレーニングを担当することとなった。

このトレーニングを実現するまでには、カンボジア人彫刻家や JHP 現地スタッフとの葛藤や互いの意識の衝突があった。しかしそれらを乗り越え、目的・志を共にしパートナーとなることで大きな成果を挙げこることができた。このような取り組みの一つは小さな事だが、美術教育普及をしていく先に、必ずカンボジアならではの美術教育構築がなされると確信している。

ミレナの文章にみる親近性とカリスマ性

——エッセイ「シンプルの道」を題材に——

半田幸子（東北大学大学院博士課程後期　所属：東北支部）

本発表の目的は、チェコ人ジャーナリスト、ミレナ・イェセンスカー（Milena Jesenská 1896-1944、以下ミレナ）の文章表現に目を向け、その文章が親近性とカリスマ性を有していたことを提示することである。

ミレナは、戦間期チェコスロヴァキアの新聞・雑誌上で活躍したジャーナリストである。残された記事の数は1000を超えている。当時の女性ジャーナリストが皆そうであったように、翻訳家としても活躍した。

当時の活躍にもかかわらず、今日彼女の名は、20世紀を代表するプラハのユダヤ系ドイツ語作家フランツ・カフカ（Franz Kafka 1883-1924）による恋文の名宛人として、いわばカフカに付随する形で取り上げられるばかりである。彼女の伝記は、1963年から現在に至るまで7冊刊行された。版を重ねたものもある。しかし著作研究は、チェコスロヴァキアの共産党政権崩壊後の1990年代以降に始まったばかりなのだ。その著作研究も、これまではもっぱらアンソロジー（ドイツ語、英語、チェコ語）が刊行されたに過ぎない。唯一詳しい分析を行ったのは、英語圏で刊行された『ミレナ・イェセンスカーのジャーナリズム』*The Journalismof Milena Jesenská*の序説のみである。

発表者の知る限り、日本での著作研究はこれまで行われていない。2010年に、ミレナの記事を日本語で唯一読める貴重書、松下たえ子『ミレナ記事と手紙』が刊行されたが、底本はドイツ語の書籍である。つまり重訳だ。チェコ語からの邦訳書は現在まだ存在しない。このような状況ではあるが、ミレナの著作研究は、著作の数の多さや当時の活躍ぶり、またカフカとの関係から考えて、チェコ文化研究のみならず、ジェンダー史、メディア文化史、カフカ研究など多方面に対する貢献が期待できるテーマである。

当時のミレナの活躍は、記事の数の多さ、そして、彼女が記事の中で頻繁に読者と対話を行っていたことをみれば明らかである。読者との対話とは、何らかのテーマを与えて投書を募ったことも一つの例であるが、文体も特徴的で、読者に語りかける手紙のようであった。たとえば、「［…］と言わないでください！Neříkejte mi,［…］!」（「晩と朝のために」1923年6月7日付*NL*、4面掲載）や「私を信じてくださいVěřte mi」（「庭へ」同年7月8日付*NL*、3面掲載）などのように命令形を用いることが多かった。対して読者からの投書においては、「ミレナさんpaní Mileno」と呼びかけられることが常だった。カフカもまたミレナの記事を愛読し、その文章に魅了された一人である。カフカは、手紙にこう記している。「鋭いし、意地悪で、反ユダヤ。豪華なり。ぼくはまるで気づいていなかったが、出版というのは洗練された手ワザだね。きみはとても落ち着いて、さも親しげに、さらに的確に読者へ語っていて、この世のことはすべて忘れ、ただ読者にかまけているふぜいだ」（『ミレナへの手紙』池内訳、209頁、下線は筆者）。これらのことから、彼女が読者に語りかけていこと、また読者の間で彼女が人気を得ていたことは明白である。そして、彼女は、命題に形容詞の最上級や二項対立的論法を多く用いた。読者はそれらの分かりやすい命題に惹きつけられた。と同時に、極論に対する反発も少なかったわけではない。ミレナは賛否両方の反応を得ていたのだ。このような彼女の文章には親近性に加え、読者をさらに強く惹きつけるカリスマ性が存在していたといえる。

本発表では、この親近性とカリスマ性について、彼女のテクストを考察しながら明らかにしていきたい。具体的には、彼女の最初のエッセイ集『シンプルへの道』*Cesta kjednoduchosti* (1926) に収録された同タイトルのエッセイ「シンプルへの道」（初出1926年5月8日）を中心に取り上げる。本エッセイ集は、彼女の活躍のピーク期に刊行さ

れたものである。彼女の思いが詰まったエッセイであると同時に、英訳も邦訳もされていない。つまり、これまでほとんど取り上げられてこなかったエッセイでもある。また、カフカの没後に発表されておりカフカは読んでいないはずだ。しかし、本エッセイのなかにも、カフカが抱いた印象と同じもの、すなわち、親近性が感じられるのである。本発表では、ミレナの文章の特徴を明らかにするために、必要に応じて、彼女と同世代および一世代前の女性ジャーナリストの記事とも比較しながら考察する。

次元形容詞「高い」の意味体系に関する日中対照研究

金　善花（埼玉大学大学院博士後期課程）

日本語と中国語には,「大きい, 高い, 深い, 長い, 太い, 厚い, 広い, 遠い」のような次元形容詞が存在する。次元形容詞には, 空間的用法と非空間的用法が見られる。「山が高い, 川が長い, 布団が厚い」のような表現は前者であり,「レベルが高い, 関心が深い, 心が広い」などのような表現は後者になる。

本研究では, 日本語の「高い」と中国語の“高”を取り上げ, それぞれの非空間的用法に見られる違いに注目し,「高い」と“高”の意味体系を対照する。

例えば, 日本語の「高」の非空間的用法には,「血圧が高い, 物価が高い, 質が高い, 地位が高い」のような例がある。それに対し, 中国語の“高”にも“血压高（血圧が高い), 物价高（物価が高い), 质量高（質が高い), 地位高（地位が高い)”という言い方がある。しかし, 日本語の「高」と中国語“高”がすべての抽象物に使用されるわけではない。日本語では「？欲望が高い」「？虚栄心が高い」のような表現をしないが, 中国語では“欲望很高”“虚荣心很高”のような表現をする。中国語には“高作”“高见”のような尊敬の意味を表す用法や,“高言”のように現実離れの意味で使用される用法も見られるが, 日本語には見られない。

このような違いが存在するには, 日中両言語の意味の捉えかたに違いがあるように考えられる。したがって, われわれが「高い」と“高”の意味をどのように捉えているのか, その実態を明らかにする必要があるように思われる。そのために, まず, 日中両言語において,「高い」と“高”を次元形容詞のグループからどのように区別しているのかという問題を考えなければならない。つまり, なぜ「血圧」は「大きい」「深い」などではなく,「高い」と捉えるのか, というような問題を考え, 次元形容詞郡全般における「高い」のポジションを考える。

次は, 日本語の「高い」と中国語の“高”の意味の全般を把握し, 体系的な対照を行うことを通して, 非空間的用法が全般的な意味体系の中でどのような役割を果たしているのか, というような問題を明らかにする必要がある。「高い」と“高”の意味がそれぞれどのような体系をしているのか, その意味体系の中で空間的用法と非空間的用法の意味はどのような関係を持っているのか, 非空間的な対象を認識する際, 空間的なイメージか関与されるかどうか, というような問題を認知言語学の視点から明らかにすることが, 本研究の目的である。

以下, ⑴で次元形容詞と「高い」の先行研究について記述する。次に, 典型性条件（松本 1993）に合わせて空間的用法と, 非空間的用法について記述し, ⑵で日本語の「高い」の意味体系, ⑶で中国語の“高”の意味体系について検討する。それから, ⑷では, 日中両言語で, 空間的用法から非空間的用法への転換がどのように実現されるのか, その動機について検討し,「高い」と“高”の意味体系を対照する。

望ましいＥＳＰ教育

髙橋　強（東海大学）

今回の発表では、ESP（English for Specific purposes）と呼ばれる教育について発表したいと思います。これは、日本語では、「特定目的のための英語に関する研究および実践」「専門英語教育あるいは研究」などと訳されています。近年、様々な分野を英語という言語を使用した教材、つまり authentic materials を使い、例えば、理系科目を英語のテキストを使用して読み、書き、話すといった活動が盛んになってきています。この点を踏まえながら、望ましいＥＳＰ教育の在り方について、大学英語教育におけるＥＳＰ教育の位置づけはどうなっているのか、またどのような取り組みが望ましいのかについて、以下の点から考察を加えていくものとする。

一つ目は、ＥＳＰ教育において、自立した学習者を育てること。

二つ目は、ＥＳＰをカリキュラムに取り入れ何を目指すのか。

三つ目は、ＥＳＰの特徴は何なのか。

四つ目は、英語教員と専門教員との連携。

五つ目は、CLIL を取り入れた ESP.

さらに、筆者は、授業では国際問題を扱っているが、その際に、「人権問題」「環境問題」をどう授業で教えればよいのかという課題について筆者の独自の視点と、学生のニーズに応じた教育を心がけることが重要であることを理解し、このＥＳＰを通して、学生が将来にわたり、自分の専門分野で、学んだことを発揮できるような、いわば学生が将来求められるであろうニーズに合った授業を実践することが重要であるという結論に至った。この様な授業実践のありかたについて、最新の理論である CLIL(Content and Language Integrated Learning 内容統合型学習)に基づき、ESP に CLIL の要素を多分に取り入れた教育の実践という相互補完の関係について述べ、学生の力を引き出す授業について考えてみたいと思う。また中級レベルの学生に関しては、CLIL の弱形を使用し、十分に学習内容についての知識を深めることが非常に効果的であり、今後の学習の応用と発展に役立てることが出来るという点でとても興味深いことが得られたので、この点についても考察を加えるものとする。以上、ESP を CLIL の手法を用い、望ましい ESP 教育について、その相互関係について述べるのが今回の発表である。